

で、最高最低の温度差は二二・二度にも及んでおり、県下では気温変化の大きい地域である。また年間の降雨量は一、九二八・七ミリと多くなっている、林業、米作などには適した地域である。

### 三 自然災害

昭和五十一年末から年明けにかけて、宇和町は異常な寒波と渇水に見舞われ、水不足という不測の事態に直面した。昭和五十二年二月には、下川の滝山川から鬼窪のノ瀬水源まで道路沿いに送水管を架設、初の給水車も出動した。また、この時の非常事態を機に、町議会では特別委員会を設置して水資源問題について調査、検討に乗り出すことになった。

昭和五十五年の夏は、異常気象により長雨と低温が続き、日照不足だったため、農作物への被害が心配された。幸い、九月に入ってから良い天候に恵まれ、稲も順調に育ち病害虫の発生も出ずに実りの秋を迎えることができた。

昭和五十六年、宇和地方は記録的な大雪に見舞われ厳しい年明けを迎えた。年末から降り続いた雪は平野部でも七〇センチ以上の積雪となり、イチゴハウスの相次ぐ倒壊や交通途絶など、各所で大きな被害をもたらした。

昭和五十七年七月、宇和地方は近年にない豪雨に見舞われた。この年の梅雨は異常気象で、六月十三日の「梅雨入り宣言」(愛媛県) 以後も日照りが続き干ばつが心配されていたところ、七月二十四日には一転して豪雨に見舞われた。

同日の宇和町における雨量は二五・一ミリ(二十三日から二十五日までの三日間の合計は三三八ミリ)。それま

での過去三〇年間の宇和町の平均年間降雨(雪)量が一、九一四ミリであるから、一日に一・五カ月分以上の雨が降った計算となる。特に二十四日の午後一時から二時までの時間降雨量は、三一ミリと記録的なものであった。このため、町内では家屋の一部破損五戸、床上浸水一戸、床下浸水二八〇戸、田畑の流失など二・四七ヘクタール、同冠水四一〇ヘクタール、道路被害四一カ所、河川被害六八カ所などの災害が発生した。

八月(二十七日)には台風十三号も到来し、道路・河川などに多大な被害が出たほか、農作物も打撃を受けた。米の平均反収は四三・二キロ(七・二俵)と近年にない不作となった。

昭和五十八年の夏は猛暑の日が続いた。松山地方気象台によれば、宇和町では気温三〇度以上の真夏日が七月は一日、八月は二五日、九月は四日記録されている。宇和町の月平均気温は七月が二五・四度、八月が二六・二度、九月が二二・六度であるから、いかに暑かったかが分かる。この年の月別最高気温は、七月が二十六日、三三・三度、八月が四日の三四・二度、九月が三日の三二・五度であった。昭和四十一年以降、宇和町の最高気温の記録は、昭和四十二年八月十八日の三五・七度である。

昭和六十一年八月二日、午後四時十五分から約一分間、多田地区を中心に雷をともなって大粒の雹ひょうが降った。雹は直径一センチから大きいものでは五センチもあり、また形も丸いものから尖ったものまでさまざまであった。この日、夏にしては強い寒気が上空にあり、夏の強い日差しで地面が温められ、積乱雲が発達したことから雹が降ったもの。特に大きな雹となったのは、空気中の温度が高かったことによる。夏の珍事に町民は驚き、降ってきた雹を拾い集める姿も見られた。

昭和六十二年は、七月九日にいったん梅雨明け発表が行なわれたものの、その後大雨が発生して二十日に梅雨明け発表が取り消されるといふ異状事態となった(正式な梅雨明けは二十四日)。

台風五号の影響で太平洋高気圧の勢力が弱まり、梅雨前線が四国地方まで南下してきたため、同月十四日以降各地で大雨が続いた。

宇和町でも十四日から二十日にかけて、三八八ミリの大雨が降った。特に十八日午前四時から五時までの一時間に六八ミリという大雨を記録。家屋半壊一棟をはじめ多発した被害の総額は、八億二、〇〇〇万円にものぼった。

平成二年の夏は、七月の雨量が平均の三分の一となるなど、猛暑の真夏日が続き農作物に甚大な被害を与えた。愛媛県は八月、農林業団体が結集して七年ぶりに「干ばつ対策本部」を設置した。また八月二十二日には大型台風十四号が県を直撃し、宇和町では同日正午から一時間で六三ミリの豪雨を記録。農作物などの被害は二億円を超えた。

この年の夏は、真夏日が松山で連続五七日となり、松山地方気象台一〇〇年の観測史上で新記録となった。

平成八年、夏に干ばつによる水不足が生じ、宇和町も一時は高台で断水状態が発生した。町では七月八日に「渇水対策本部」を設置し、渇水状況の調査や住民への節水の協力を呼びかけた。この時の干ばつによる農作物の被害総額は、ブドウ、葉タバコ、飼料作物など約五、〇〇〇万円にのぼった。